郷土

第 10 号
平成12年３月30日

編集・発行／宮本常一記念事業策定審議会
東　和　町

記念事業により設置した町内史跡の記念碑、説明板

建武二年宝篋印塔

村上武吉宝篋印塔

浄西寺三尊碑

青木周弼・研蔵生誕の地

シーボルト上陸の地

地家室の石風呂

宮本常一と写真

宮本常一記念事業
専門部会長
米安　晟

はじめに

宮本常一が写した写真の数は、まだ正確に把握されていませんが、膨大な数になり、列島改造前の日本の姿を、克明に写真記録として残した、貴重な遺産といえます。

この価値については、いろいろの評価があると思いますが、最近読売新聞に載っていました、外人の写真家ジョニー・ハイマスさんが、あまりにも変わった日本の現在の姿を見て嘆き、「日本の三十年間の変化はひどい。悲しいですね。タイムスリップして、田舎の豊な風景に戻したい気持ちです。」と話しています。

また、環境問題に取り組んでいるグレッグさんは、日本での大気汚染の影響を知るには、歩くことが一番と、車もなにも使わず歩いて、松や植物の被害を発見しています。

宮本常一が三十年前から四十年前を中心に、なぜ写真を撮ったか、何故わざわざ歩いたのか、日本人でなく外国の人が宮本常一の業績を教えてくれているようです。

宮本常一と写真

ハイマスさんのいう、日本の古き良き姿を含め、写し記録されているのが宮本常一の十万枚に及ぶ写真と聞き取り調査の記録です。渋沢敬三は宮本常一に日本各地を歩いてもらい、日本の基になっている本当の日本の姿を、古老から聞き書きして、記録するよう頼まれました。宮本常一は日本中を歩き回り、特に

城山小学校の丘から（現東部病院）

宮本先生撮影（昭和30年代）

宮本先生撮影（昭和30年代）

現　在

「町から離れて、旅人もあまり行かない所に、日本のかっての姿が残っている。」
と、車で行けないところを、主に歩いたわけです。それが、七十三年の生涯に合計十六万キロ、地球を四周するほどの行程を歩き、超人的ともいえる旅をされました。まさに前人未到の業績といえます。

そのとき宮本常一は、聞き取り用のノートとともに、必ずカメラを携え写真を写されてきました。これが歩いて聞き書きした以外に、全国に亘る日本の姿の、克明な記録となり、今になっては写そうと思っても、写せない貴重な写真となりました。

これまで整理された写真数は日本のものが殆どで、平成十一年十一月までに整理され、焼き付けされた数は、八万五千四百十三枚ですが、まだ全部ではありません。昭和二十年ごろの古い写真（名刺版）や、ほかにアフリカを旅行したときの写真約五千枚があります。これも宮本常一の眼を通して観た、外国特に開発途上国の貴重な写真です。

和佐保育所

宮本先生撮影

現　在

宮本常一はなぜこれだけの写真を撮ったのでしょうか。

それは宮本常一の師匠である、渋沢敬三、さらには敬三の父の篤二からの、日本の写真史とも言える写真の長い歴史があるからだと思います。

渋沢篤二と写真

明治の元勲渋沢栄一の長男篤二は日本最初のルポライターと言える人で、日本に写真機が紹介された明治二十六年（一八九三年）頃から写真を撮り始め、明治三十二年（一八九九年）に義兄穂積陳重に従って欧米に留学し、特にフランス・パリの写真を撮り、初めて日本に紹介しました。

明治四十一年頃イーストマンコダックカメラが出るとすぐ利用するなど、日本のルポルタージュ写

内　入

宮本先生撮影（昭和30年代）

現　在

小　泊

宮本先生撮影（昭和30年代）

現　在

真撮影の先駆者でした。
　渋沢敬三は父篤二の写した写真をまとめて『瞬間の累積』という写真集を出版されています。歴史の流れのなかの瞬間を捉え、これを累積したものが写真集であるという、渋沢敬三独特のユーモアのある書名の付いた写真集で、宮本常一写真史が出来るとすれば、日本で最初の業績となるとみられます。

渋沢敬三と写真

　渋沢敬三は日本銀行総裁、大蔵大臣などの要職につかれ、太平洋戦争直後の日本経済の立て直しに奔走される傍ら、民俗学者として学会から表彰されるほどの業績を挙げられました。
　また、苦労して努力している学者に対し、陰の援助をされた方です。旅の記録を写真に止めることは、渋沢敬三自身が早くから実施してきたことで、十六ミリの映写機が出ると、いち早く利用するなど、父篤二ゆずりの精神を持っておられ、旅の記録を写真に止めるということが、渋沢敬三から宮本常一に続き、旅の記録写真の基となっています。
　渋沢敬三は太平洋戦争終結後、日本が立ち直れるかを知るために、農村を歩く旅に出ています。宮本常一が同行することが多く、昭和二十二年十月（一九四二年）京都を出発点に九州まで旅をしています。そのとき大島に立ち寄られています。この旅で農村を中心に歩き、日本は必ず立ち直れるとの自信を得たといいます。

油　宇

宮本先生撮影（昭和30年代）

現　在

「絵引き」と宮本常一の写真

　宮本常一の写真の中には、『真貴山縁起』『餓鬼草紙』『絵師草紙』『石山寺縁起』などの古代絵巻が多く写されています。
　これは渋沢敬三の「絵引きは作

れぬものか」という発想からきたもので、古代絵巻のなかには、当時の民俗的事象が、描かれた絵巻のなかに、かなりの量の民具その他が、偶然記録されていることに気付き、文章のみでは分り難い面を、はっきりさせるために、絵で解説することを思いつき、まとめたものが、「日本常民生活絵引」です。

また宮本常一はその後、NHK文化センターの講座で「絵巻物に見る中世民衆の生活史」と題して十回の講義を行い、そのダイジェスト版として、「絵巻物に見る日本庶民生活誌」を出版されています。絵巻、草紙類を写真に残すことで、貴重な資料となっています。

宮本常一と写真の内容

渋沢敬三に日本中を旅して、古老から日本の姿を聞き書きにより残すように言われた宮本常一は、同時に写真撮影を行いました。これで残されたのが、列島改造前の日本の写真による記録で、今となっては写そうと思っても出来ない貴重な写真の記録となっています。

その内容は日本の各地を足で歩き、撮影した写真を見ますと都会・農村・漁村・山村の写真・集落・民具・服装類など目に付くあらゆるものが写されています。

また全体を把握するために、空から写した日本各地の俯瞰（ふかん）写真も含まれています。

これらの写真の一部を利用してまとめられた本が、『私の日本地図』（株式会社同友館　昭和四十六年発行）で、一から十まで十冊刊行されています。

このなかの「周防大島」という本では、

一、ふるさとの村

下田八幡宮

宮本先生撮影（昭和30年年代）

現　在

白木山と段々畑

宮本先生撮影（昭和30年年代）

現　在

から始まり周防大島が紹介されています。この本で使用された写真は全部で約三百枚、うち宮本常一の生まれた長崎の写真は七十八枚使われています。

　このなかには埋め立ての行われている海岸線の写真、各集落の写真、家の写真、墓から民具、漁具などが示されています。最近よく話題になる棚田に変わって、周防大島では段畑が多く、これを大島では段々畑（だんだんばたけ）と呼んでいました。

　その頃の段々畑は、畑の畦が等高線のように描かれた、きれいな白畑の写真と、ここにミカンが植え変えられて行く写真、海岸線埋め立て中の写真などが出ています。

　東和町長崎が戦前戦後でどのように変わったか、埋め立て後の跡地がどのように変わったか、今の「道の駅サザンセト東和」も、文化財収蔵庫も、農村交流伝承館「服部屋敷」も東和町陸上競技場も、東和町総合体育館のあるところも、総て海でした。恐らく何年か経つと、この様なことは忘れられてしまうでしょう。

　また白木中学校は水田が埋め立てられて出来たことも、宮本常一の写真が残されているからわかることです。昭和初期から太平洋戦争後まで、畑は白畑として畑作物の栽培に利用され、続いてみかん畑に変わり、人手不足と高齢化から耕作放棄の続いている現状、一方では二万坪に及ぶ埋め立てが行われ、海岸線は道路と防波堤と埋め立て地で変貌しています。変貌前の姿を宮本常一は克明に記録しています。渋沢敬三のいうまさに時代の流れの中の瞬間を記録したものですが、今となっては写せない貴重な瞬間の累積です。

宮本常一の写真と整理

　宮本常一は自分で写した写真を、写真フイルム（ネガ）、記録台帳、自作アルバム、スライドと丁寧に記録整理されています。

一、フイルム台帳

　宮本常一は自分で写した写真フイルムを整理するために、一冊のノート（フイルム台帳）を作り、フイルム一本につき次ぎの項目で整理してあります。

①フイルムナンバー
②撮影年月日
③撮影場所
④備　考

の順に書き込んであり、宮本常一自身でフイルムの整理・保管を実施され、神崎宣武が一部を手伝っています。

　まとめ方をみますと、フイルム一本ごとに整理し、ナンバーワンは

①フイルムナンバー　一
②撮影の日付
　昭和三十年五月三十一日
③撮影場所　東海道線・東京

となっています。

　このノートの記録は、

①フィルムナンバー　一一五五
②撮影年月日
　昭和四十九年十月十七日

下　田

宮本先生撮影（昭和30年代）

現　在

森から嵩山をみる

宮本先生撮影（昭和30年代）

現　在

③撮影場所　富山で終わっています。このアルバムの特徴は、昭和三十年から五十年にかけて、列島改造前の日本の姿を、克明に写してあり、今では写そうと思っても、写せない貴重な写真となっているのです。

　このほかに昭和二十年～二十二年頃の周防大島、対馬・その他の写真フィルム（名刺判の大きさ）が約二百枚ありますが、ここに出ている三十年前の写真がそれです。

（フィルム整理ノートとの重複の有無など再整理中）

二、宮本常一作成のアルバム

宮本常一家には、宮本常一作成のアルバムがあります。全部で百二十九冊有ります。現在整理中で、宮本常一作成のフィルム作成カードにほぼ準拠していますが、名詞版の大きさの写真で、変色した写真、貸し出して戻ってはいるが、そのまま別になった物もあり、アルバムの元の位置に戻すには、難しい写真もあります。今後は貸し出し・返却を容易にする保存法の確立が必要です。

　このアルバムは写した位置や年代を知るために、貴重な資料であり、今後東和町で再製した、サービスサイズ写真の撮影位置の照合に必要です。また古文書を写したものも多く、「絵引き」を作るために写した物ですが、古文書を調査するときに、現物を見ることが難しい時、このフィルムやアルバムで調べることも可能で、写真の一つの価値と云えます。

三、その他の写真

①アフリカ
　撮影フィルム　十一本
　撮影枚数　五三七九枚
②スライド　八二九枚
③昭和二十～二十五年頃の写真
④フィルム無写真　未整理

ここまで整理してみると、昭和二十一年ころに大島郡・瀬戸内海と対馬を調査した写真以後、昭和三十年までの十年間の写真が、殆どないことです。この頃宮本常一は農村を歩き、農業指導に力を入れた時期ですが、昭和二十五年八学会、二十六年九学会連合の対馬調査に参加しているので、別のところに資料として残されているのかもしれません。調査する必要があります。

四、今後の写真整理と利用

今後の写真整理については、

ア、撮影場所の不明な写真の解析と照合写真で撮影場所などの不明なものを、宮本常一作成のアルバムと照合して明確にします。
イ、インターネットによる全国利用を実現するための準備
ウ、未発見写真の探索
エ、スライド・ビデオ等の整理

等です。

終わりに

《宮本常一の眼により日本の姿を写真により残す》、このことは

宮本常一の真の理解者であった渋沢敬三、さかのぼって日本で最初のルポライターであった渋沢敬三の父渋沢篤二の精神に連なっていると思います。文化人類学・考古学・民族学・民俗学・民具学・農学等を併せた希有の学者宮本常一の、貴重な文化遺産です。速やかに整理して保存態勢を整備し、今後の利用に供せられるようにしなければなりません。

インターネット上で宮本常一の名だけで、すでに検索件数三百九十二件と出てきます。

また宮本常一の研究に東和町を訪れる若い学生、出版社なども跡を絶ちません。宮本常一に関する資料で、写真以外に宮本家から寄贈されるものをまとめてみますと、次ぎのようです。

宮本常一の遺した物

1. 図書類
①宮本常一の著書及び著作集を含む雑誌類
②宮本常一が企画・監修・編集したもの
③宮本常一の指導により刊行したもの
④宮本常一の著作・研究を論じたもの
⑤宮本常一が参考にした図書
2. 宮本常一の手書き原稿・コピー
3. 宮本常一の野帖、ノート
4. 宮本常一の日記、手帳、出納帳
5. 宮本常一宛ての手紙類
6. 宮本常一が撮影、又は撮影させた写真フィルムと台帳、アルバム

以上は総て宮本常一家から東和町に寄贈されるものです。

①1、の図書類については、宮本千晴（常一の長男・府中市に在住）が整理中であり、2、3、4、5、については府中市と山口県東和町宮本家に保管され、整理後東和町に寄贈されます。

②写真フィルムは東和町で焼き付けを業者に依頼しアルバム作成中です。

③宮本常一作成アルバムは米安晟が預かり整理中です.

これらを集めて早く「宮本常一郷土大学記念館」なり、「宮本常一一文書館」なり、「宮本常一ふるさとづくりの館」なりをつくりたいものです。

渋沢敬三・宮本常一と米安晟

米安晟は渋沢敬三・宮本常一の援助により、植物・野菜について絵巻・写真を活かした図書発行及び生態写真の撮影を実施しましたので、末尾を借りて報告します。

渋沢敬三と米安晟

渋沢敬三の〈絵引き〉にヒントを得て米安晟は、野菜作りの本を作るとき、イラストを多く取り入れた手引き書を作り「絵でわかる野菜つくり」を出版したところ、ベストセラーとなり、改訂を繰り返しながら、すでに十年以上も出版されています。説明の文字を少なくして、図解したのが解りやすく受けたのです。まさ

▲ダイコンの根：１日で最長８cmも伸びた

に字引ならぬ〈絵引き〉です。

テレビ・スライドは声のでる絵引きとも云えるもので、今後さらに増加するとみられます。

渋沢敬三・宮本常一と

米安　晟

宮本常一著『民俗学の旅』12.《戦後の農漁村を歩く》の項に次ぎのように書かれています。

【作物の生態観察はその後東京農業大学の米安晟博士が実に丹念な実験写真をとったものを次々に寄贈され、それによって自信をもって人にも語ることが出来るようになった。

米安晟博士は実験室で生態観察をしたのではない。圃場でこれをおこなったのである。夜間畑に出て作物の生態変化をつぶさにとらえたものなど貴重な資料である】

と述べてくださっています。私の研究が宮本常一を力付けたということは、師匠と仰ぐ宮本常一に誉められたのであるから、この文を見出したとき少しでも恩返しができたと、今もたいへん嬉しく思っています。

この写真による実験を続けるにあたっては、渋沢敬三先生により写真代の援助を受けたのです。渋沢敬三先生は貧乏で金に困りながら研究を続ける人に、実に上手に恥をかかさないように、援助の手をさしのべて下さったのです。

幸い私の植物・野菜の生態写真を気に入られ、昭和三一年渋沢先生が欧米主要国に出張の際、持参されたとのことで、帰られてから私に「外人は観察力に乏しく、なかなか信じてもらえなかった」と話してくださいました。

渋沢敬三・宮本常一は、日常の観察を大切にされ、変化して止まることのない自然現象・社会の変化を、写真に捉えて残すことが、大切であることを、理解され実施されたのです。

私は植物・作物・野菜などの生態写真を、一般に写されていない、夜間の植物の表情・環境の変化による葉の動きとか、地下部の根の写真を中心に撮影を続けました。

その写真の一部が宮本常一のアルバムに貼付されていることを、アルバム整理の際、生態写真の見出しで、入っているのを発見し、驚いた次第です。

渋沢敬三は私にこう話されました。

「写真を撮るのはカメラマンが上手かもしれないが、写真は下手でも、それぞれの専門家の眼のほうが正確にねらいを写すことが出来る」と云われ、植物・野菜の生態写真を私に撮るよう云われました。

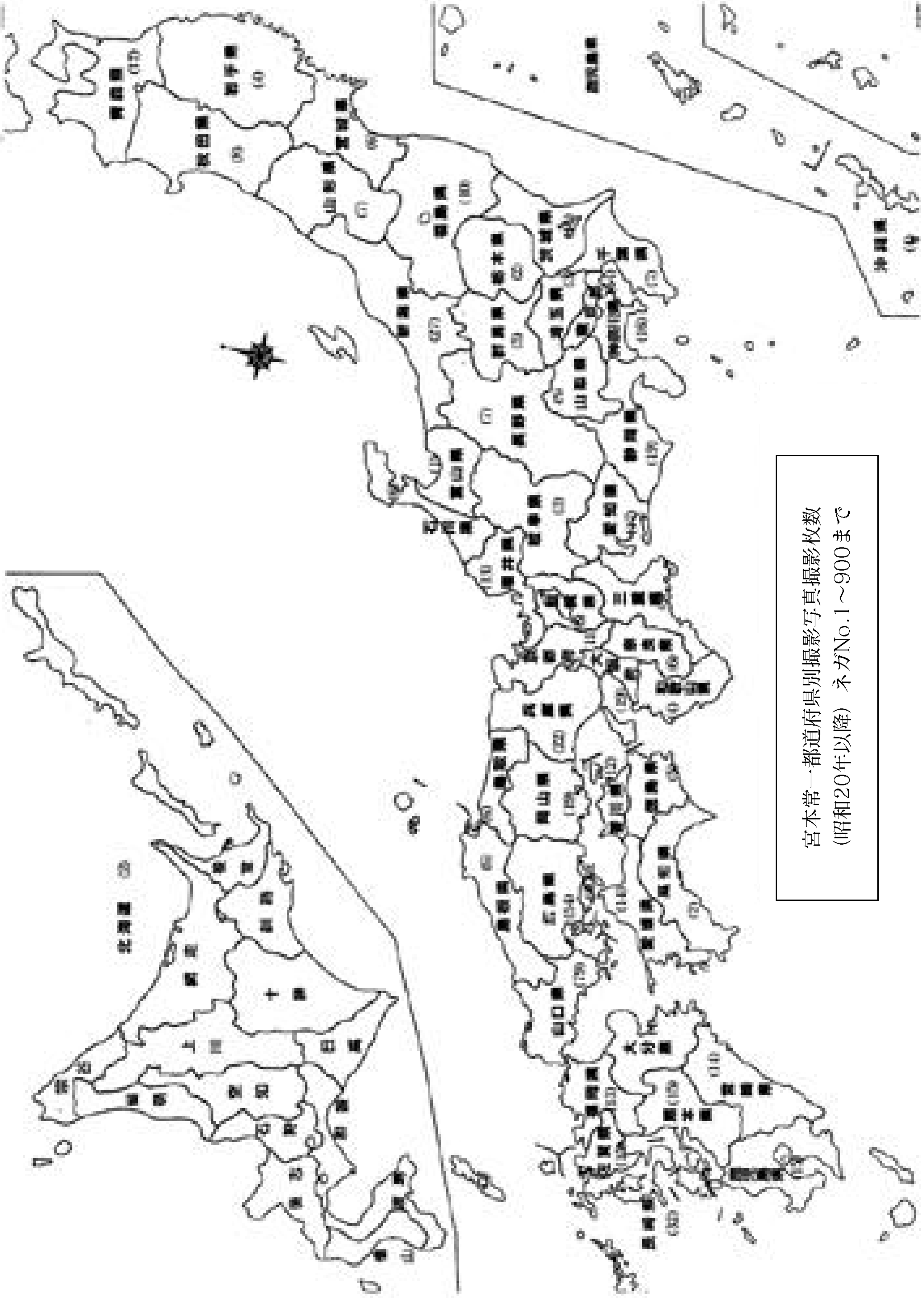
宮本常一の場合は民俗学者としての観察眼で写真をとり、他の人には真似の出来ないもので、貴重な写真です。

宮本常一・米安晟の写したものは違っていても、変り行く自然現象・社会現象の瞬間を捕らえた、渋沢敬三のいう「瞬間の累積」です。

―文中敬称略―

▲ハ ギ（昼）

▲ハ ギ（夜）



宮本常一都道府県別撮影写真撮影枚数
(昭和20年以降) ネガNo.1～900まで

二十一世紀への手紙

宮本常一記念事業
推進部会長
新山玄雄

偲ぶ会―水仙忌―

今世紀最後の正月があけて一月三十日の夕べ、水仙の香りがかすかにただよう中、東和町の神宮寺で今年も宮本常一先生を偲ぶ会がおこなわれました。

　この日は先生のご命日で水仙忌を名づけています。水仙は全国各地の野辺に、寒風にむかって可憐な花を咲かせます。その姿は、道行く人々に冷たい風に吹かれていても春のおとずれが近づいてきていることを感じさせます。

　そんなイメージが近代化によって忘れられた土地をくまなく歩き、そこに生きる人々を明るく励ましていった宮本先生の姿と重なります。

　先生は特異な民俗学者として知られ、七十三年の生涯に合計十六万キロにわたる行程を旅し、その旅はのべ四千日にもおよんでいます。

　宮本先生を敬愛してやまなかった作家の司馬遼太郎さんは、こう語っています。

「宮本さんは、地面を空気のように動きながら歩いて歩き去りました。日本の人と山河をこの人ほどたしかな目で見た人は少ないと思います。」

　その宮本先生も新世紀に入る来年には没後二十年をむかえます。今各方面から先生の関連の本が出版され、マスコミでも取り上げられるようになりました。やっと時代が宮本学の真価を認識しはじめたのでしょう。

すさまじい変遷

私は今年末に満五十歳になります。一説によりますと、その今世紀後半の五十年間の世界の総生産量は、太古の昔から五十年前までのそれと匹敵するといいます。私が生きてきたこの五十年の年月は、人類の歴史からいえば、ほんの一瞬のことです。

　その一瞬の間に、私たちは数十万年分の資源を費やし、その上膨大なつけを来世紀にまわそうとしているのです。

いかにその変遷がすさまじいものであったか、特に日本の「高度成長」は、世界史にも例のない「民族的実験」でした。

　ここに宮本先生の残された九万点におよぶ写真があります。戦前撮られた写真は、残念ながら空襲で失われてしまいましたが、戦後とり続けた膨大な写真をみると、戦後日本列島の日常生活や日常風景がおどろくほどのスピードで変わっていく過程がよくわかります。二万冊の蔵書とともに東和町に寄贈されたその資料は、たいへん貴重なものです。

　今、私たちは急激に過去を忘れ去ろうとしています。

　私たち人間というものはおかしなものです。変化や進歩ということに夢中になっていると平気で過去の足跡を消し去るようです。過去を消し去られたことに気づくと大きな不安をいただきます。その不安からぬけ出すためにさらにまた変化や進歩をおい求めていくようになります。

　その連鎖の果てにはどんな世界がまっているのでしょうか。

人間は伝承の森

過去があって現在があり、そしてその連なりの中に未来があります。そこには伝承がなくてはなりません。

　宮本先生は「人間は伝承の森」であるといわれました。

「その人間にむかって歩んでいけ、決して過去を矮小化（わいしょうか）してはいけない。矮小化することは人間を矮小化することだ。人間は時には間違いも犯すことがあるが、それほどおろかではない。」

楽天的ともいえるほど人間を信じた先生でした。

　その伝承を容赦なくたち切っていく現代、その未来は本当に豊な世界なのでしょうか。

　現代の繁栄からもっとも遠くに

いる高齢化日本一のこの町に今多くの人が訪れてくるようになりました。そこに人を引きつけるもの、それは何でしょうか。
「あとになるものがさきになり、さきになるものがあとになる」といわれます。私たちはもっと足もとを見、もっと謙虚になるべきと思います。

宮本学の継承

宮本先生出生の地であるわが町では、昭和六十一年に「宮本常一記念事業」がはじまり、資料の収集、講演会の開催、「郷土」の発行などの事業を継承して取り組んできました。先生晩年の夢ともいうべき「郷土大学」もどうにか存続しています。宮本学を継承すべく館の建設を望む声も高まっています。

変化や進歩ばかりをおい続けた国づくり、町づくりはいつか無惨な姿をさらすでしょう。

いまこそ一人一人が身近な世界で何を伝承し、何を捨てていくのか考え、選択する時です。

その一人一人の営為によって二十一世紀は、つくられるのだと思います。

＊この「二十一世紀への手紙は」TYSのローカルワイドニュース「TYSナウ」で二月二十一日に放送されたものです。毎日新聞にも掲載されました。

南方熊楠記念館の視察を終えて

岩本重雄

先ず位置から申し述べたい。宿を出て西方に向かうとすぐに白浜海岸に出る。これほど美しい海岸に出会うのは今までにないことであった。まるで白砂糖を振りまいたような粒子の細かい真白な砂であった。鳥取砂丘や鳴門海岸の砂もこれにはかなわないであろう。天女の舞うにふさわしい美しい海岸、今日は太平洋の波も静かであった。ここを出て大きく右に曲がると前方に円月島が見える。マッチ箱を横に寝かしたような極めて小さい島であるが、中央に円形の洞穴があいている。夏には夕日がこの中にごっぽり落ちるというからこれを眺望出来る人は幸福なことであろう。この円月島を抱くようにして半島が出ているがその名前を私は知らない。

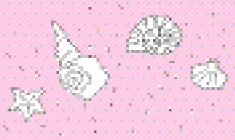
南方記念館はこの半島先端部の丘の上に建設されていた。ここはもと植物園だったとかで多種多様の樹木がそのままに保存されている。その間の小道を登ると昭和天皇御製の歌碑が前方神島を遥に望んで建っていた。
石碑に向かってうやうやしく最敬礼

―雨にけぶる神島を見て
紀伊の国の生みし
南方熊楠を思う―

記念館に入ると、応接室で記念館建設の説明から今日までの状況を詳しく説明を受けた。私どもには大きな収穫で今後の課題解決の基本として生かされるものと思う。テレビで博士の活動大要を観て展示室を三階まで巡視した。

南方博士は和歌山城下に生まれ、記憶力の天才で超人的、八、九才の頃からわが国最初の百科事典ともいう膨大な辞書を写しとっている。外にも中国の本草綱目五十二巻をはじめ貝原益軒の大和本草や太平記まで諸方を走りまわり、諳（そら）んじてわが家にかえりたちどころ筆訳して写本を作り上げている。これらがすべててんじされているのであるがその超人的な記憶力と努力に心底から感歎させられる。

これらが全身にすべて生かされて、いま日本人の急務は十尺の自由を国内に伸さんよりは、むしろ、一尺の国権を外国にひろげることにある。そしてアメリカに渡り、実に苦労されたことが記されている。

「わが思うことは涯なし、命に涯あり、見たき書物は多く、手元に金は薄し。」

努力に努力を重ねた超人でもあったと思う感激新たなり。三階の上は展望台で四季折々の景観をゆっくり楽しむことが出来るようになっていた。自然の美しさが人を呼ぶと思った。長崎のシーボルト記念館も長崎港を眼下にして遠望し、昔の出島もすぐ前方にあった。南方記念館も太平洋を遠望して風景の地にある。日の当る道は幾筋もあると思うが宮本記念館も海岸を望む台地の上に経済的にも実行可能な点を軸に自信をもって取り組むことが大事であろうと思いながら出会いに感謝して帰途に着いた。